

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 2 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K10862

研究課題名(和文)大学生アスリートの価値の明確化を促す心理サポートプログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a psychological support program to promote values clarification in university athletes

研究代表者

荒井 弘和 (Arai, Hirokazu)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：30419460

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、大学生アスリートが持っている価値とその機能を解明し、自らの価値の明確化を支援するプログラムを開発することであり、以下の成果が得られた。(1) 大学生アスリートは、「他者をリスペクトする」など、多様な価値を持っている。(2) 価値が明確で、価値にコミットした行動を行っているアスリートほど幸福感が高い。(3) アスリートが持つ価値は、「スポーツパーソン」と「アスリート」という2つに大別できる。(4) 価値の明確化のプログラムに参加することで、自らの体験と価値との関連に対する気づきを得ることができる。とくに、異なる特性を持つ競技に取り組むアスリートの価値に触れることは有意義である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(1) 現代のアスリートが持っている具体的な価値を抽出し、アスリートの価値が非常に多様であることが示された。(2) 明確な価値を持っているアスリートほど幸福感が高いことから、アスリートが明確な価値を持つことを支援することの意義が確認された。(3) アスリートが価値について考える際には、「スポーツパーソン」と「アスリート」という2つの側面が重要である可能性が示された。(4) アスリートが価値を明確にする作業によって、アスリートは様々な気づきを得ることができると示唆された。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to elucidate the values and functions of university student athletes and to develop a program to support the clarification of their own values. The main results of the study were as follows (1) University student athletes have a variety of values, such as "respect for others". (2) Athletes whose values are clear and whose actions are committed to their values have a higher sense of well-being. (3) Athletes' values can be divided into two main categories: "sports person" and "athlete". (4) Participating in a value clarification program can lead to an awareness of the relationship between one's experiences and values. In particular, it is useful to be exposed to the values of athletes who are involved in sports with different characteristics.

研究分野：スポーツ心理学

キーワード：価値観 アスリートセンタード アクセプタンス&amp;コミットメント・セラピー 道徳教育 大学スポーツ協会

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

スポーツの価値と呼ばれるものには、2種類ある。1つは、スポーツに関わる人に与える影響である。もう1つは、スポーツに取り組むアスリートが持っている価値である。本研究では、後者の価値に注目する。

ここでいう価値とは、「個人に人生の全般的な目標を提供し、その目標に向けた一貫性のある行動を導くオーギュメンタル」である(吉岡, 2006)。オーギュメンタルとは、行動を生起させるルールのことである(松本, 2006)。価値について言及した三田村(2017)は、どのような生き方をしていきたいのか、何のために死んでいきたいのかという基準を価値として設定することによって、「自分自身で自由に選んだ選択的保持の基準」に沿って行動を進化させていくことができる」と述べている。

国際オリンピック委員会は「卓越」「友情」「敬意/尊重」がオリンピック精神の中心的な価値であると強調している(日本オリンピック委員会, 2014)。国際パラリンピック委員会(2014)は「勇気」「決断」「平等」「鼓舞」をパラリンピックの価値として挙げている。これらの価値は、強く、正しく、美しく、スポーツのあるべき姿を私たちに教えてくれている。しかし、アスリートは、これらの価値だけを持っているのではなく、多様な価値を持っているはずである。そして、スポーツは社会と関連して存在しているため、過去の資料を参照するだけでは不十分である。現代社会に生きるアスリートが持つ価値を把握するべきである(荒井, 2019)。

近年、大学生アスリートに対する期待は高まっている。実際、多くのトップアスリートが、大学を経て活躍している。大学生アスリートは、多様な役割を持っているゆえに、「勝ちたい」「自己記録を更新したい」「名声を得たい」などのスポーツに関連した価値だけでなく、「学業を修めたい」「恋愛をしたい」「安定した生活を送りたい」など、多様な価値が葛藤している状態にあると予想される。また、アスリートのデュアルキャリアやセカンドキャリアを考える際、価値の葛藤は看過できない。現代のアスリートにとって、価値の重要性は増すばかりである。

社会がアスリートに対して抱いている価値・社会がアスリートに期待している価値ではなく、大学生アスリート自身が考える価値に注目する必要がある。青年期にある大学生は、価値が揺らぐ時期を生きている。大学生アスリートは、入学後に成人になることで責任も増すし、高等学校までと比較して自律的にスポーツに関わる者も多くなるため、自らが持っている価値を明確化することが重要になる。

近年、心理療法においても、価値を積極的に扱おうとする動きがある。その1つが、アクセプタンス&コミットメント・セラピー(ACT)である。第3世代の認知行動療法と呼ばれるACTには、6つのコア・プロセスがあり、その1つに「価値の明確化」がある。ACTでは、価値の選択を手続き化し、価値を明確化する(武藤, 2006)。すべてのACTの技法は、クライアントが自ら選択した価値に沿って生きるのを支援することより下位に置かれ、脱フュージョンやアクセプタンスといった主要な介入プロセスでさえ、ある意味では二次的である(ヘイズほか, 2014)。そして、ACTの枠組みに沿って、価値の明確さや価値にコミットした行動の程度など、価値に関連する要因を評価することのできる尺度が開発されている。

2021年にわが国で東京2020大会が開催されることに伴い、わが国のスポーツ界において、勝利という価値が強調されすぎてしまう懸念もある。つまり、勝利至上主義が加速する恐れがある。しかし、アスリートは多様な価値をたずさえることを許容されるべきであろう。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、大学生アスリートが持っている価値と、その機能を解明することであった。そして、自らの価値の明確化を支援するプログラムを開発することを目的とした。具体的には、以下の5つの研究を設定した。

研究1 文献研究「現代のスポーツは、どのような価値と関連しているのか？」(研究1の成果は上記の背景に含めている)

研究2 インタビュー調査「大学生アスリートは、どのような価値を持っているのか？」

研究3 調査研究(実験研究)「大学生アスリートが持っている価値同士は、どのように関係し合っているのか？」

研究4 調査研究「価値はどのような機能を持っていて、どのようなメカニズムで機能するのか？」

研究5 プログラム開発・介入研究「価値について考える・対話することは、どのような効果をもたらすのか？」

## 3. 研究の方法

### (研究2・3)

#### 調査対象者

4年制大学の1-4年生で、運動部(いわゆるサークルは除く)に所属している競技者で、研究参加に同意した者とした。

## 調査内容

### (1) 人口統計学的データ

性別、年齢などをたずねた。

### (2) 価値に関連する要因

本研究では3つの価値の尺度を使用した。1つ目は **Personal Values Questionnaire-II (PVQ-II)**: 土井・横光・坂野, 2014) を用いた。この尺度は土井他 (2014) によって信頼性および妥当性が確認されている。人生における様々な領域(家族関係・友人/社会関係・恋人/恋愛関係・仕事/キャリア・教育/個人的成長・レクリエーション/レジャー/スポーツ・スピリチュアリティ/宗教・地域性(コミュニティ)/国民性・健康/身体的ウェルビーイング)の中から自らが最も重要と考える領域を一つ選択して回答する形式である。本研究では、「レクリエーション/レジャー/スポーツ」という領域のみを使用した。「レクリエーション/レジャー/スポーツにとって大切に思うこと(価値)」の教示を改変して提示し、自由記述を求めた。具体的には「あなたが部活動で行っているスポーツに関して、あなたは一番どんな人になりたいか書いてください。例えば、スポーツチームの一員として一緒にプレイしたり、競争意識を持ったり、活動的であることを大切に思う人もいます。しかしあなたなりにスポーツに関してどのような人であることが大切か書いてください」という教示を採用した。

そして、その価値を選択した理由、どの程度その価値に沿って生活できているかなどについて、価値の方向を決め選択する状態を測定する「価値の選択」因子4項目、嫌悪的な随伴性(負の強化、あるいは罰を含む)によって価値が動機づけられているか測定する「嫌悪的な随伴性」因子2項目、価値に沿って行動する状態を測定する「価値に沿った行動」因子2項目の3因子8項目(価値を自由記述する1項目を除く)について5件法で測定した。

2つ目に、価値の明確化尺度(齋藤・柳原・嶋・岩田・本田・大内・熊野, 2017)を使用した。価値づけに関する項目は、価値に沿った行動への動機づけを測定する「動機づけ」因子5項目で構成されている。コミットされた行為に関する項目は、困難な場合でも価値に沿った行動が継続することを測定する「行動継続」因子5項目、価値に沿った行動に随伴する行動内性強化を自覚することを測定する「強化の自覚」因子5項目の2因子10項目で構成される。

**PVQ** において記述してもらった対象者の価値の内容について、価値づけに関する項目では、「この価値を意識したとき、感じたことについて、最も当てはまる数字を一つ選んでください」、コミットされた行為に関する項目では、「過去2週間、この価値に向かうため、具体的にやったことについて、最も当てはまる数字を一つ選んで下さい」という教示文で7件法によって回答を求めた。得点が高いほど、価値づけ、コミットされた行為の効果を得られていることを示す。

3つ目は、日本語版 **Valuing Questionnaire** (土井・坂野・武藤・坂野, 2017) である。この尺度は、個人的に重要なことを明確に自覚している程度を測定する「前進」因子5項目と、価値の軽視あるいは他の心理的体験への注目によって、望まない体験を回避し、価値から気をそらしてしまうために、価値に沿った生活がどの程度崩れているかを測定する「障害」因子5項目の2因子10項目で構成される。7件法によって評価を求めた。

### (3) 主観的幸福度

内閣府経済社会総合研究所 (2012) にしたがって、「現在、あなた自身はどの程度幸せですか。「とても幸せ」を10点、「とても不幸せ」を0点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかの数字を1つだけ〇で囲んでください」という教示によって、主観的幸福度をたずねた。0-10から1つの数字を選択させ、得点が高い方が幸福と感じていることを表している。

### (4) 協調的幸福感

「他者との協調性と他者の幸福」「人並み感」「平穏な感情状態」に焦点を置き、対人関係の調和に関連する幸福感を測定する **Hitokoto and Uchida (2014)** を用いた。9項目で構成され、「全く当てはまらない (1)」-「非常に当てはまる (5)」から当てはまるものを1つ選択させた。

## 手続き

大学の講義前後における集合調査法、もしくは、縁故法によって調査を実施し、質問紙の配布・回収を行った。その際、研究参加に関する説明をするとともに、同意書を配布した。なお、参加同意書には、本研究の目的や所要時間、回収した質問紙やデータの取り扱い方法、本研究から得られる結果のフィードバック方法、研究者の情報と連絡先について明記している。そして、対象者が回答をいつでも中断できる権利を明記し、倫理的な配慮を行った。なお本調査は、法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会において審査を受け、研究実施の承認を得た上で実施した。

## (研究4)

### 調査対象者

4年制大学の1-4年生で、運動部(いわゆるサークルは除く)に所属している競技者で、研究参加に同意した者とした。

## 調査内容

### (1) 人口統計学的データ

性別、年齢、学年などをたずねた。

### (2) アスリートの価値へのコミットメント

予備調査によって作成された90項目に対して「競技生活における価値(価値観)を以下に示

します。あなたは、それぞれの価値（価値観）に基づいた行動を、自らの意思で、どれくらい行っていますか？」という教示によって回答を求める。回答は、0（行っていない）–10（行っている）の11件法であった。

### (3) 主観的幸福度

研究2と同様であった。

手続き

本研究では、多様な大学生アスリートの実態を明らかにするという目的に鑑みて、幅広いサンプルからデータを集めるため、社会調査会社（株式会社クロス・マーケティング）に、インターネット調査の実施を委託した。研究の概要、研究参加の任意性、研究参加に伴う負担の可能性と回答を中止する機会の保障、研究成果の公表と研究によって期待される恩恵、個人情報の取り扱い（プライバシーの厳守）などを説明し、同意が得られた場合のみ、調査への参加を依頼した。本研究は、法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会の承認を得て実施した。

### (研究5)

調査対象者

4年制大学の1–4年生で、運動部に所属している学生アスリートで、研究参加に同意した者であった。

調査内容

#### (1) 人口統計学的データ

性別、年齢、専門種目をたずねた。

#### (2) 部活動で競技に取り組むことにおける価値

「あなたが部活動で行っているスポーツをする中で、あなたが一番大切に思っていることを書いてください」という質問によって、自由記述で回答を求めた。

#### (3) ワークの感想

ワークについて、よかった点、改善した方がよい点について回答を求めた。

手続き

#### (1) 価値について説明する。

#### (2) 数名のグループを作る。

(3) 自分の価値を考え、その価値に基づいたエピソードを思い出す。この段階では、自分の価値が何であるかは共有しない。

#### (4) ペアでインタビューしあい、相手の価値を予想する。

(5) グループ内で、他己紹介によってペアの価値を紹介し、予想した相手の価値をグループでシェアする。

(6) その後、予想した価値と実際の価値の答え合わせを行う。そして、なぜ実際の価値と予想された価値が一致したのか、または、異なったのかについて対話を行う。これをペアごとに行い、グループ内で繰り返す。

(7) 全体で振り返りを行う。グループから1–2人に、グループの様子やグループで出された意見を発表してもらう。

一連のワークを行い、その後に調査用紙に記入をしてもらった。研究を実施する前に、研究の目的を説明し、研究参加は任意であること、質問の際に心理的な負担を感じる可能性があること、研究参加の途中で同意を撤回することが可能であること、研究結果は公表される場合があるが、その場合もプライバシーは厳守されることを伝えた。本研究は、法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会の承認を得て実施した。

## 4. 研究成果

### (研究2・3)

研究参加に同意しなかった10名を除き、本研究の分析対象者は325名（男子210名・女子115名）であった。KJ法の結果、「他者をリスペクトする」「責任感を持つ」「礼儀正しく振る舞う」「チームに貢献する」「辛くても頑張る」「挑戦する」など、90の価値が得られた。つづいて、価値に関連する要因と主観的幸福度・協調的幸福感との関連を検討した。価値に関連した要因の多くは、主観的幸福度・協調的幸福感との間に中程度の有意な相関係数が認められたが、「嫌悪的な随伴性」因子は、主観的幸福度・協調的幸福感と関連していなかった。また、「障害」因子は、主観的幸福度と関連していなかった。

また、COVID-19の感染拡大によって対面での実験を実施できなくなった状況に鑑みて、現在オンラインでの実験を計画している。具体的には、**Inquisit Player** を用いて、**Implicit Association Test (IAT)** を実施することを計画している（法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会承認済み）。実験プログラムは試行済みである。

### (研究4)

215名の大学生アスリートのデータを因子分析によって分類した結果、アスリートが持つ価値は、「マナーを守る」「フェアプレイをする」など「スポーツパーソン」因子と、「ストイックに取り組む」「目標を持つ」などから構成される「アスリート」因子という2つの要素に大別できることが示唆された。

**(研究 5)**

**14**名の大学生アスリートを対象に調査を行い、価値を報告することの難易度は高くないと考えられた。また、自らの体験と価値との関連に対する気づきや、他者の価値に触れることの機能、とくに自らと異なる特性を持つ競技に取り組むアスリートの価値に触れることの機能について示唆を得ることもできた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 鈴木郁弥・清水智弘・泉重樹・荒井弘和	4. 巻 10
2. 論文標題 大学生アスリートは受傷したチームメイトをどう認知しているか？	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 埼玉アスレチック・リハビリテーション研究会誌	6. 最初と最後の頁 21-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榎本恭介・清水智弘・荒井弘和	4. 巻 30
2. 論文標題 大学生アスリートが考えるフェアプレイ促進・障害要因	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 スポーツ産業学研究	6. 最初と最後の頁 81-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5997/sposun.30.1_81	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤優希・飯田麻紗子・榎本恭介・苅部俊二・荒井弘和	4. 巻 38
2. 論文標題 大学生アスリートにおける家族のコミットメント	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 法政大学スポーツ研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 5-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 榎本恭介・荒井弘和	4. 巻 38
2. 論文標題 競技種目の違いによる競技中の反社会的態度の比較：大学生競技者を対象として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 法政大学スポーツ研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 11-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 荒井弘和	4. 巻 70
2. 論文標題 アスリート・コーチに対するメンタルサポート3.0	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 体育の科学	6. 最初と最後の頁 34-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金澤潤一郎・榎本恭介・鈴木郁弥・荒井弘和	4. 巻 59
2. 論文標題 大学生アスリートの注意欠如・多動症状と脳震盪の関連	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心身医学	6. 最初と最後の頁 47-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15064/jjpm.59.1_47	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 荒井弘和	4. 巻 59
2. 論文標題 アスリートの抱える心身医学的問題とその支援	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心身医学	6. 最初と最後の頁 15-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15064/jjpm.59.1_15	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 荒井弘和・樋口匡貴・伊藤拓・中村菜々子	4. 巻 31
2. 論文標題 東京2020大会の開催延期決定直後における大会開催に対する東京都民の認知	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 スポーツ産業学研究	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 荒井弘和・榎本恭介・清水智弘・鈴木郁弥・所昭宏	4. 巻 29
2. 論文標題 大学生アスリートにおけるかぜ症候群・インフルエンザおよび花粉症の罹患状況と対処行動	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本健康教育学会誌	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 荒井弘和・鈴木世奈・友野一希・竹内洋輔	4. 巻 2
2. 論文標題 新型コロナウイルス感染症と氷上アスリート	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 氷上スポーツ研究	6. 最初と最後の頁 13-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Taku, K. & Arai, H	4. 巻 25
2. 論文標題 Impact of COVID-19 on athletes and coaches, and their values in Japan: Repercussions of postponing the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Loss and Trauma	6. 最初と最後の頁 623-630
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/15325024.2020.1777762.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 荒井弘和・榎本恭介・鈴木郁弥・青野博	4. 巻 30
2. 論文標題 大学生競技者を対象とした日本スポーツ協会の「フェアプレイで日本を元気に」キャンペーンに関する実態調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 スポーツ産業学研究	6. 最初と最後の頁 215-221
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5997/sposun.30.2_215	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -



1. 著者名 荒井弘和	4. 巻 70
2. 論文標題 アントラージュの多様性がアスリートセンタードを導く	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 体育の科学	6. 最初と最後の頁 743-747
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒井弘和・宅香菜子	4. 巻 70
2. 論文標題 新型コロナウイルスの感染拡大とアスリートセンタード	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 体育の科学	6. 最初と最後の頁 593-597
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 荒井弘和・深町花子・榎本恭介
2. 発表標題 価値が明確な大学生アスリートは幸せか?
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会46回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒井弘和・深町花子・鈴木郁弥・榎本恭介
2. 発表標題 大学生アスリートのスポーツ・ライフ・バランスはウェル・ビーイングと関連する
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会45回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 荒井弘和
2. 発表標題 スポーツメンタルトレーニング指導士から見たアスリートの心理サポート（自主シンポジウム：認知行動療法の実践におけるスポーツ領域の特異性）
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第44回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 荒井弘和
2. 発表標題 受傷アスリートの胸の内（シンポジウム：みんなで考えるオーバーユース障害の予防と治療）
3. 学会等名 第13回埼玉アスレチック・リハビリテーション研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 荒井弘和・榎本恭介・清水智弘
2. 発表標題 大学生アスリートにおけるかぜ症候群への対処行動
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会47回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 平野裕一・土屋裕睦・荒井弘和	4. 発行年 2019年
2. 出版社 培風館	5. 総ページ数 223
3. 書名 グッドコーチになるためのココロエ	

1. 著者名 荒井弘和	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晶文社	5. 総ページ数 272
3. 書名 アスリートのメンタルは強いのか？ スポーツ心理学の最先端から考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

法政大学スポーツ心理学研究室のホームページ <a href="http://health.sports.coocan.jp/wp/">http://health.sports.coocan.jp/wp/</a> 法政大学文学部心理学科スポーツ心理学研究室のホームページ <a href="http://health.sports.coocan.jp/index.html">http://health.sports.coocan.jp/index.html</a>
---

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------